

家蚕と天蚕 2.

鈴木英文

エリサン（エリ蚕）

カイコの他にもう一つ家畜化されたヤママユガ科の蛾がいます。日本にも生息しているシンジュサン(*Samia cynthia*)という蛾の親戚で、エリサン（またはヒマサン）(*S. ricini*)と呼ばれています。この蛾は、以前はシンジュサンと同種とされていましたが、現在はシンジュサンと近縁のインド北部に分布する*S. canningi*が改良された飼育種と考えられ、カイコと同様、野外には分布していません。このエリサンも古くから養蚕が行われており、インド・アッサム、ベトナム、中国などで飼育されていますが、家畜化がカイコほど古くはない



エリサン（腹部が白くなる特徴がある。）

いたためか、シンジュサンとエリサンはよく似ています。ただ家畜化により翅がしっかりとびる個体は少ない、とも言われています。カイコが桑しか食べないことに比べ、エリサンはヒマ、シンジュ、キャッサバその他多くの植物の葉を食べる、休眠が無いため年中飼育できるなどの利点がありますが、エリサンの繭は、カイコのように繰糸できないため真綿状にして糸紡ぐしかない欠点があります。

サクサン（柞蚕）

サクサン(*Antheraea pernyi*)は、日本のヤママユ(*A. yamamai*)に近縁の種。ヤママユより一回り小型で、朝鮮半島、中国、ロシア南東部に分布します。現在でも中国東北部・吉林省や遼寧省で絹糸をとるために飼育されていますが、まだ家畜化には至っていないため、野生のものと変わりません。野蚕絹糸としての生産は、年間3500トンほどが生産され、世界各国に輸出されています。日本へは明治時代に中国から移入され、長野県などで飼育されたことがあります。

テグスサン（楓蚕）

もう一つ日本で産業として成り立ったものに、中国のテグスサン(*Saturnia pyretorum*)があります。中国春秋戦国時代の諸子百家の一人、列子の湯問編に、「繭絲為綸（繭の糸を釣糸とする）」と書かれているので、この釣糸が何の蛾の繭から作られたかはわかりませんが、すでに釣糸（テグス）に絹糸が使われていたことがわかります。テグスサンは中国南部からベトナム、インドなどに分布し、繭を作る寸前の老熟幼虫から絹糸腺を取り出し、酢酸液に浸してから引き延ばし荒テグスを作ります。テグスサン自体は、日本への導入はされませんでした。中国南部（江西省～海南島）から荒テグスと呼ばれる原料を輸入し、鉄板に細く丸い穴をあけ、そこを通すことで太さを均一にする“磨き加工”をして、本テグスとして販売されました。テグスの生産地として、徳島県鳴門市堂浦、兵庫県淡路島の洲本市由良などが知られています。本テグスは、1935年アメリカでナイロンが発明され、ナイロンを主流とする丈夫な合繊テグスにとって代わられてしまいましたが、皮肉なことに、近年ではこの丈夫さゆえの釣糸公害が社会問題になっています。